

ベテラン技術者に聴く

30年の歩みと未来への思い

日本水工株式会社／九州支社／技術部／部長 山元裕美



1. 勤続30周年を迎えて

新年の仕事始めの日、勤続30周年のお祝いを会社からいただきました。「もうそんなに?!」と驚いていた矢先、「ベテラン技術者に聴く」というコーナーで執筆を依頼されました。最初は「ベテランなんて…」と戸惑いましたが、30年の節目に自分の経験を振り返る良い機会と思い、筆を取ることにしました。

2. 「水が好き」という原点

私がこの仕事を選んだ原点は「水が好き」という思いです。子供の頃、毎週、家族で川遊びをした思い出が今でも心に残っています。蓮華畑の横を流れる小川で、石を投げたり、サワガニを探したり、何気ない休日がとても幸せでした。

しかし、小学校に上がる頃、東京に引っ越してきた私は、コンクリート三面張りの水路を「川」と呼ぶ光景に衝撃を受けました。「汚い…」「どうやって遊べばいいのか…」と感じたあの時の気持ちは、今でも鮮明に覚えています。この経験が、「川をきれいにしたい」という思いを抱ききっかけとなり、下水道計画の仕事に携わることになりました。

3. ゼロから下水道を創り上げる経験

1994年に入社してからの10年間は、全国的に下水道の普及が急ピッチで進められていた時代でした。この間、全体計画や事業計画といった基本計画を数多く手がけました。入社1年目に、上司にとあるまちの何もない河原に連れて行かれ、「ここが処理場用地だよ」と説明されたとき、「ゼロから下水道を作り上げることができるんだなあ」と感動したのを覚えています。

処理場の全体配置検討では、維持管理動線等を考慮し、試行錯誤を繰り返したのに、完成した処理場は、私が描いた当初計画とは異なる形になり複雑な思いでしたが、まちを訪れるたびに、計画した路線上にマンホールが増えていく様子を見て、子供の成長を見守るような喜びを感じました。そして、20年で整備が完了した際には、子

供の成人を祝うような気持ちで、まちの方々と喜びを共有しました。

4. 若い頃の苦勞と学び

若い頃の苦勞話として忘れられないのが、とある町の係長様とのやりとりです。提出した検討書が付箋だらけで返され、「修正がないところに付箋を貼ればよかった」と冗談交じりに言われたこともありました。新たな検討書を持っていくと、さらに新たな付箋が増える…。入社1年目はそんなやりとりが続きました。

その係長様は寛大にも、根気よく私に対応してくださり、育てていただきました。その係長様が部長となり定年退職される際、初めてお手紙を書き、これまでの感謝の気持ちを伝えました。すると部長の奥様から「手紙を読ませて頂きました。家では仕事の話をしないので、こんなに人に感謝される仕事をしていたことを知ることができ、本当に嬉しいです。」とのお手紙を頂き、思わぬ恩返しをできたような気がしました。今振り返ると、古き良き時代にお客様に育てられた経験が、今の私を支えているものと感じています。

5. 仕事の変化と新たな挑戦

入社後10～20年の間は、総合地震対策計画やBCP、長寿命化計画、下水道ビジョンに携わる機会が増えました。普及拡大による市民生活や環境への貢献だけでなく、災害時にも下水道が機能すること、また未来にわたって下水道サービスが継続されることを目指し、自治体の皆様との対話や審議会を通じて、各まちの特性に応じた下水道ビジョンづくりに奮闘しました。

入社20年目には、東京支社から東北支社に異動し、東日本大震災からの復興計画にも携わりました。津波で壊滅的な被害を受けた町の嵩上げによる復興計画では、これまで市民生活を支えてきた下水道管きょの撤去設計も行いました。この管きょを設計・工事してきた方々や、普及拡大に努めてきた自治体の方々の思いを考えると、心の整理がつかない複雑な思いを抱きながら、復興のために通らねばならぬ道と思ひ業務に対応したことを覚え

ています。

6. 指針改定と未来への貢献

被災地での復興や、人口減少が進むまちでの下水道事業経営に関わる業務経験を踏まえ、20~30年目には、「下水道施設計画・設計指針と解説-2019年版-」や「小規模下水道施設マネジメント指針と解説-2024年版-」の改定に携わりました。これらの指針改定では、下水道協会や全国上下水道コンサルタント協会の会員各社の先鋭メンバーの方々と知恵を出し合い、整備から管理・運営までのマネジメントに関する考え方を示し、未来の下水道事業運営に貢献することができたと考えています。

この業務を通じて感じたのは、技術者同士の連携の大切さです。異なる視点や経験を持つ方々と議論を重ねることで、より良い指針を作り上げることができました。技術者としての成長は、こうした「人とのつながり」から生まれるものだ実感しています。

7. 変わらない思いと変わりゆく仕事、人とのつながり

この30年間、「水が好き」という思いは変わらず、私を支えてくれています。初めて仕事をしたまちの農業用水路、技術士試験の体験論文で取り上げた夕日が輝く日本海、そして最近携わっているまちは水道水を全て地下水で賄っているなど、各地で出会う「水」はどれも愛しい存在で、私の心を穏やかにしてくれます。

一方で、仕事の内容は整備計画から事業運営に関わる仕事へと変化し、お客様との関係も、発注者と受託者という枠を超え、共に考え作り上げる同士のようにつながってくださる方々が増えたと感じています。施設計画・設計では答えがある程度絞られる部分がありましたが、下水道ビジョンのような事業運営では答えは一つではなく、CAPDサイクルによる評価と改善を繰り返しながら未来

へ歩んでいくものと思います。こうした難題に対し、庁内検討会を重ね議論し、未来を考え抜く自治体の方々には本当に頭が下がる思いですし、その姿に支えられ、私も日々の業務に取り組んでいます。

また、昔は現地調査では市民から「うちにも下水道が来るの？」と声をかけられることが多く、その期待が大きな励みになりました。事業運営に関わる仕事では市民の声を聴き、共に考える機会が増えました。ある審議会で、市民代表のお母さん委員が「月500円や1000円の負担増で、子供たちに素敵な未来を残せるなら喜んで支払う」と発言されたことが印象に残っています。このように、下水道に関わる仕事は整備から運営へと変化し、市民とのつながりも「サービス提供」から「ともに創り運営する」関係へと進化しました。

8. 水に関わる若い技術者へのメッセージ

私は「水が好き」という思いからこの仕事を始め、さまざまな方々との関わりを通じて未来を考えることができるようになりました。とあるまちの下水道史を調べる中で、下水道がまだ普及していない頃に川の清掃活動をしていた方々の写真を見た際、「この方々が今の下水道の整備状況を見たら、どんな言葉をかけてくださるだろう」と思いを馳せました。その瞬間、これまで事業を進めてきた方々への尊敬の念を抱くとともに、その努力を引き継ぎ、未来の人々にも誇れる仕事を残さなければならぬと強く感じ、いまがあります。

若い技術者の皆さんにも、ぜひ自分の「大切なもの」を持ち続けてほしいと思います。それは家族や友人、趣味でも構いません。その「大切なもの」はきっと「水」とつながっています。「水」はすべての命の源であり、私たちの仕事はその「水」を守る尊い役割を担っています。これを読んでくださっているみなさまとも、未来に誇れる仕事をご一緒できれば嬉しく思います。